「耳下腺腫瘍」治療実績 論文に

北斗病院の坂東副院長

副作用少なく再発率も低く

英語で世界に発信

北斗病院副院長の坂東伸幸医師（55）＝頭頸部（けいぶ）腫瘍センター長、耳鼻咽喉科・頭頸部外科部長＝が、耳下腺腫瘍に関する臨床研究論文をまとめた。同病院での耳下腺腫瘍の検査診断率や治療成績が、国内外のがん専門病院と遜色ないとする結果をまとめ、欧州の医学雑誌にも掲載された。坂東医師は「診断、治療経過を検証し、結果をまとめることも医師の仕事。今後の治療に生かしていきたい」と話す。

坂東医師は2009年に同病院に着任後、耳鼻咽喉科・頭頸部領域の疾患における治療経験や、研究成果をまとめた論文を英語で20編（共著含む）、日本語で40編（共著や総説含む）発表している。

その理由について「北斗病院で治療した患者の検査結果や経過を振り返り、検証した結果をまとめることも、医師の仕事の一つと考えている」とし、「自身や若手医師の診療のレベルアップ、さらには医療の質の向上につながれば、との思いから」と話す。

頭頸部腫瘍は、耳下腺に加え、咽頭や喉頭、甲状腺など、のどや首にできる腫瘍だが、「診断や治療が難しい。手術・抗がん剤・放射線治療などを上手に組み合わせて治療し、副作用を少なくして、根治を目指さないといけない」（坂東医師）病気だ。

現在は「がん遺伝子異常のデータを解析し、病態との関連について解析を進めている」（同）という。

しこりは早めに受診

同病院は2007年、耳鼻咽喉科・頭頸部外科を開設。頭頸部腫瘍の診断・治療については、他科や多職種連携によるチーム医療で取り組んでいる。坂東医師は「耳の下や首のしこり、腫れがみられたら、早めに専門医療機関の受診・検査を」と話す。

【耳下腺腫瘍】耳の下にある「耳下腺」にできる腫瘍。8割程度は良性だが、2割程度はがんを含む悪性。腫瘍は多種。耳の下あたりにピンポン球のようなしこりが生じたり、痛みが生じたり、急に腫れてきたり、顔面神経まひを引き起こしたり―など、腫瘍に応じて症状もさまざま。

精度高い術前診断

耳下腺腫瘍は、全身の腫瘍の0・1％とまれな腫瘍で、「その多くは良性腫瘍も、悪性腫瘍（がん）が発生することがある」（坂東医師）。良性・悪性とも多くの種類があり、それぞれ臨床経過が異なるという。このため、坂東医師は「いかに精度の高い術前診断が得られるか、また、手術では耳下腺の中を走る顔面神経を保存しつつ、いかに腫瘍を確実に摘出するかが重要」と話す。

そこで、坂東医師は①甲状腺がんの診断にも有効な「穿刺吸引液状処理細胞診」を、耳下腺腫瘍の術前診断に用いた結果、有用性が高いこと②腫瘍摘出手術時に神経刺激装置を用いたことで、顔面神経まひなどの術後合併症が低率だった③耳下腺がんの手術後、「トモセラピー」と呼ばれる高精度放射線治療装置を用いた放射線治療では、副作用が少なく、がんの再発率が低かったことなど、北斗病院での治療成績が、「欧米のがん専門病院と比較して遜色ないこと」などの重要な知見を報告。欧州の医学雑誌「Oncology Letters誌」にも掲載された。

北斗病院の治療成績を英語論文で世界に発信する坂東医師